十二段峠の由来

昔、村々で一夜の宿を求め祭文を語る芸人がいた。祭文語りという。ある年老いた祭文語りが打当から仙北郡の戸沢へ行くことになったが、杖を頼りに袖の子沢に入ったとき、同じ村里から来た若者が追いついて来た。若

者が「夕べ祭文を聞かせてくれた祭文さんではないか。これから仙北へ行かれるのなら、私も戸沢へ行くから一緒に行くべい」と声をかけると、老人は「私はもう年だから、とてもそなたにはついて行けない、私にかまわずに行ってください」と答えた。だが若者は気の毒に思い「私が背負って行こう」と、老人を軽々と背負い、袖の子沢から峠をめざし、けもの道を踏み分けて登り出した。

背中の老人が申し訳なさそうに「私は駄賃も払えないから、そなたの背中で祭文を語りましょう」というと、若者は「それはぜひ聞かせてくれ」と喜んだ。それではと、老人は手に持った貝を吹き、朗々と語り始めた。一席は源氏平家の戦いの話であった。宇治川の合戦から始まり、平家が西へ西へと逃れ、壇の浦の戦いに敗れてついに西海の果てに消えた話を語った。若者はその物語を聞きながら、汗びっしょりで峠をめざした。

ようやく物語が終わったとき、峠にたどりつき、若者が「祭文語りさん、峠につきましたよ、本当によい語りを聞かせていただいてありがとう」というと、老人は「これで源氏平家の戦いの全十二段の物語りを終えました」と、礼をいって若者の背中からおりた。二人は峠でひと休みしたあと、ふたたび若者が老人を背負い、戸沢へ向かった。親戚に老人の宿を頼んだ若者は、その足で用を足し、ふたたび峠を越えてわが家へ帰った。打当についた若者は、村人に「祭文語りを背負い、源氏平家の全十二段の物語を聞き終わったところであの峠に登りついた」と話した。それ以来、村人たちはこの峠を「十二段峠」と名づけたという。なお、秋田内陸鉄道の中村・上戸沢間のトンネルは十二段峠の由来をもとに、十二段トンネルと名づけられた。